

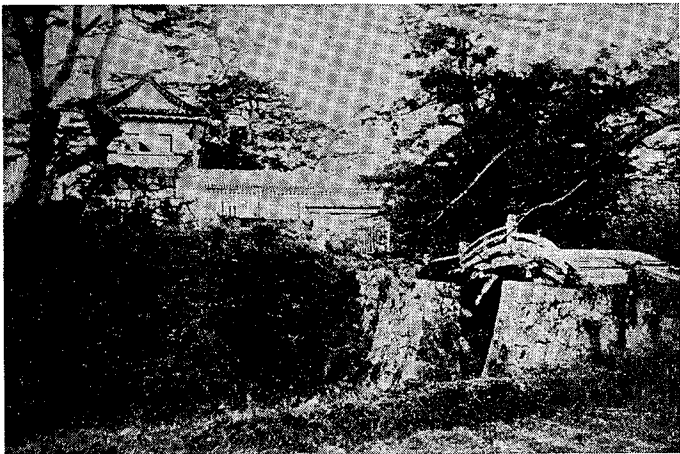
小田原史談

第58号

小田原史談会 市内3-22
小田原市文化館
所 小田原市文
発行 小田原市郷

新建完成近き常盤木門

小田原市が市制三十年記念事業に建設中の小田原城本丸正面の常盤木門は三月末



常盤木門 (明治初年)

屋日本瓦葺である。面積は多門櫓と渡り櫓と合せて四四六・九平方メートル。工費は六千三百四十万円です。市内の津山建設の請負いである。

さて、昔の常盤木門は北条時代には門はあっても、門前の枳形はなく、渡櫓、多門櫓(長屋)もなく単なる冠木門であった。後世のように小田原城最大の城門と完成したのは稲葉時代で、寛文十二年(一六七二)であった。

多門櫓は南側のは二間半梁、桁行折廻し二十五間四尺、北側のは二間梁、折廻し十三間であった。(今回は北側は復元しない)渡櫓の下の冠木門は内法一丈二尺、開き一丈三尺、潜り六尺であった。そして明治三年に破却された。復元の新門が完成すれば高さ十三メートルの白亜の大門が建つ。完成の日が待遠い。

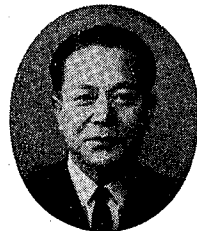
年頭のことば

小田原市長 中井 一郎

新年あけましてお目出と
うございます。
皆様のご健康を心から祝
福いたします。

私は、市長として二回目の新春を迎えました。昨年十二月二十日、市制三十周年の記念式典もどきうりなく終え、ここに新しい年を迎えたのでありますが、これを契機に心を新たにすて市政にたずさわる所存であります。

人生には、心の転換とか意志を充実・強固にする機会が幾つかあると思います。たとえは就学、進学、成人式、就職、結婚式、それらが改まる元旦等です。私も、四十六年の年頭にあたり、市長就任の当初を省り、現在に生き、将来に期待して見たいと思えます。私は、市長就任にあたり「自然と人間」「物と心」の調和のとれた街づくりを念頭においたのであります。それは急速に発展した技術革新にもなう工業生産の追求と、文化の発達にともなう都市構造の急速な変化が、人間性のそう失と自然



新春祝詞

会長 中野 敬次郎

明けましてお目出度うございます。会員の皆様お健やかな新年を迎えられました。謹んで祝詞を申し上げます。小田原市は昨年十二月二十日に市制施行三十周年の盛大な記念式を催しまして、

本年はいよいよ三十一年度の新しい発展期にはいることになりましたが、私達の史談会も創立十五周年を終って第十六年度はいりました。皆様ともども力を合せて、心を新にして一層会

ったからにはありません。「住みよい郷土、清潔で健康的な街をつくる」ことが私の念願であります。

箱根連山を背に、陽光おどる相模灘にいだかれた小田原、緑と潮風に恵まれて歴史を生み育てた小田原、そして今は諸先輩のご苦勞と市民各位のご努力により産業経済、教育文化、交通の中心地となり、一市十町広域市町村圏の核都市として重要な位置づけをいたしました。そして今後は常に新しい時代感覚と、古きよきものへの敬意をほらいつつ、恵まれた立地条件を十分活用して市民の福祉と教育の充実、生活文化の向上等のため大いに努力する覚悟であります。

の内容を整え、事業の発展に努力して行かなければならないと存ずる次第であります。

「山上また山ありて峰層々たり、波間路なくして路縦横なり」というような意味の古い名句があったように思いますが、私達の小田原史談会の行く道もこれと同様で、今後いろいろな困難

(以下二P下欄)

小田原市の新指定文化財について

中野敬次郎

昭和四十五年十二月に小田原市は新指定文化財として、
仏像三、墓石一、画像二、
工芸品二の八個の重要文化財と一株の天然記念物を指定したので、その概説を記して会員諸兄の参考に供したい。

信仰の対象になっていた。寺伝では安阿弥の作で、母公菩提のために一刀三札の作と伝えるが、鎌倉末期の作品で、同寺が芝増上寺の末寺であった関係からか、有名な増上寺の黒尊仏の様式系統をもっている。彫刻も優秀であるが、特に顔貌姿態が引きしまっていて、嚴肅の感を与える。目は玉眼である。殆んど後補がない。

おって、全体に極めて温和な感じを与えているが、五尺七寸(一六五センチ)という高さは小田原地方のこの式には珍らしい大ききである。両手首、両足首は後補であり、また後年全身に黒く漆を塗ってしまったのが、この像の初見の価値を落している。材は檜である。

損傷が甚しいので、その点からするとこの像はほぼ原型が保たれているのと、当地方出来の藤原期仏像としては稀なものである。高きで高き価値を認めてよい。しかしこの像も相当に老化が目立ち、衣紋線が彫が浅いので全体にすり切れが目立ち、宝髪上の化仏の一部が欠けている。また宝冠、胸飾、台座、両足などに後補が多い。今後の保存に余程の注意が必要である。

この塔は高さ一六六センチ(台座とも)あって、塔身と基礎とに「右者为左衛門入道也。比丘尼満阿、徳治三年戊申六月廿三日。沙弥性阿」と刻してある。

なことや、種々の障害があると思いますが、くちけることなく切り開いてたゆまない歩みを続けて行かなければなりませんし、また一方には、努力することによって道はいくらでも開けると思えますので、自信と勇氣をもって進んで行きたいと存じます。それには、何んと言っても清く明るく楽しい会であるということが根幹の精神でなければなりません。どうか皆様、楽しく語り合い、楽しく事業を進めてまいりましょう。ご協力下さい。

(一)本誓寺の阿弥陀如来立像(木造寄木、漆箔)一軀
本誓寺は谷津四二七番地にあって浄土宗で当知山重願院本誓寺と称する。文龜元年(一一五〇)に今川氏親の從臣で鎌倉の住人藤枝安楽寺殿(名は不明)の開基した寺で、下総国飯沼の弘經寺三世願智西閣上人を招いて開山としたのである

同寺所蔵には本尊の三尊弥陀と外に阿弥陀像二軀の何れもよい仏像を安置しているが今回指定のものはそのうちの一軀である。

この像は像高九六センチ、台座高三七センチあって、作は古く藤原期末のものと思われる。藤原期様式の仏像として、この像と形式の同じものには早川真福寺(観音堂)の十一面観音立像があるが、真福寺のものは

大見寺は酒匂三六九番地にあって、光明山無量院と号する浄土宗京都智恵院末の寺院で、寺伝によると古くから小庵のあった跡に、天文三年僧退堂によって起立されたものであるという。

この面像は開山安斐禪師の頂相で、像上に像主自讃の語が書かれておる。幅軸の縦六四・五センチ、横三五・五センチある。

安斐禪師は小田原大森氏第一代頼明の子に生れ、二代頼春の弟、三代頼頼、四代頼春の伯父に当っており、大雄山最乗寺の第十世にのぼり、また西相、駿豆地方に巡錫して多数の寺院を建立し、また甥の氏頼を援けて政治、文化に手腕を振り大森氏最盛期出現に功勞の大きい高僧であった。そして晩年永く総世寺に住んで

この像は像高七八センチ、台座高五六・五センチあって、俗に本誓寺の齒吹如来様と呼ばれて古くから知られており、御口から少し歯をむき出してゐる姿が地方

清涼式様式を型通り備えて

この像は像高九六センチ、台座高三七センチあって、作は古く藤原期末のものと思われる。藤原期様式の仏像として、この像と形式の同じものには早川真福寺(観音堂)の十一面観音立像があるが、真福寺のものは

この塔は、同寺の境内にある小島氏三墳と称せられるものの一つで、徳治三年(一一〇八)の建立であるが小田原市内において年代の刻した墓碑中の最古のものであるし、地方的粗製のものにはあるが、宝篋印塔の形式がまだ完成しない鎌倉中期の完全塔として貴重な遺品と言える。

この塔は、同寺の境内にある小島氏三墳と称せられるものの一つで、徳治三年(一一〇八)の建立であるが小田原市内において年代の刻した墓碑中の最古のものであるし、地方的粗製のものにはあるが、宝篋印塔の形式がまだ完成しない鎌倉中期の完全塔として貴重な遺品と言える。

この面像は開山安斐禪師の頂相で、像上に像主自讃の語が書かれておる。幅軸の縦六四・五センチ、横三五・五センチある。

この像は像高七八センチ、台座高五六・五センチあって、俗に本誓寺の齒吹如来様と呼ばれて古くから知られており、御口から少し歯をむき出してゐる姿が地方

清涼式様式を型通り備えて

この像は像高九六センチ、台座高三七センチあって、作は古く藤原期末のものと思われる。藤原期様式の仏像として、この像と形式の同じものには早川真福寺(観音堂)の十一面観音立像があるが、真福寺のものは

この塔は、同寺の境内にある小島氏三墳と称せられるものの一つで、徳治三年(一一〇八)の建立であるが小田原市内において年代の刻した墓碑中の最古のものであるし、地方的粗製のものにはあるが、宝篋印塔の形式がまだ完成しない鎌倉中期の完全塔として貴重な遺品と言える。

この塔は、同寺の境内にある小島氏三墳と称せられるものの一つで、徳治三年(一一〇八)の建立であるが小田原市内において年代の刻した墓碑中の最古のものであるし、地方的粗製のものにはあるが、宝篋印塔の形式がまだ完成しない鎌倉中期の完全塔として貴重な遺品と言える。

この面像は開山安斐禪師の頂相で、像上に像主自讃の語が書かれておる。幅軸の縦六四・五センチ、横三五・五センチある。

文明十六年(一四八四)九十歳歳の長寿を保って歿した。

この画像は、禪師の帰依者であった甥の大森氏頼が直接禪師の姿を写したものであり、また像上の讃語は禪師の自筆であるので、禪師の風貌と自筆を見ることのできるもので、小田原大森時代の遺品の代表的なものである。

禪師の讃は

「豎不把拈柄。横不拈鳥藤。不殺断仏種。不滅却祖燈。道根不染子。禅味不熟僧。黙檢持来了。一個老宗楞。イスイ後拾頭看扶桑紅日昇。明昇庵主写予願實求讀。」

文明三年龍集辛卯十月十八日とあって、文明三年(一四七二)の作品であることが明かで、文中の明昇庵主とは氏頼のことで、入道して寄栖庵明昇と号したのである。

箱書によると慶安四年(一六五二)十月十八日に大森氏の子孫の大森信濃守頼直(旗本)によって修理が加えられたことが明かである。この画像の出来た当時の禪師の年齢は八十歳に近いが

温容豊頬で、立像の体軀大きく堂々たる風格を示している。しかし上欄の讃語は剣落がすすんで殆んど文字が判読できない。

衣冠束帯で円座の上に座したいわゆる綱卷天神の形式で、作柄も優秀で、筆勢があり、管公の相貌は眼光鋭く白い歯をむき出した怒りの様相を示している怒り天神の姿である。少しの剣落もなく保存がよい。

箱の裏紙に「永祿四年より明治八年まで三百拾貳年、寛文十二年より明治八年乙亥年まで貳百四年」と記したものでらしい。新編相模風土記に「天神像一軸、菅丞相自筆」とあるのがこれである。北条時代の作品として貴重である。軸裏に「寛文拾貳壬子年八月吉日、御表具師法橋森右衛門弟武部吉衛門尉常重」と記してあるのは第一回表装修復の時の記録である。

小田原市では、昭和四十五年十二月二十日市制三十周年の式典を行い、その節全市の各家庭に梅の苗木を配り記念とした事は大変意義のある事と、思います。その文中に、「小田原の梅は北条時代に、寒さの中に咲く強さと、ふくいくと香る、清純さが当時の武士に愛好され、梅の栽培が広く普及したといわれております」の一節がありますが、北条時代この梅を愛し詩として、残した武将は多数あったと思はれますが、現在判明して居りますのは殆んど無く、僅かに北条氏康の梅花詩ではなからうかと、思われますので記念として天文四年氏康、二十才の作と伝えられて居ります。一文を紹介致します。

梅花詩一題

難波 明

有武無文復翼同有文無武不英雄此梅遠贈

君親見紅白花開一樹中

此の詩により氏康は如何に文を愛し武を好んだ武将としての奥かしい、人柄が想はれます。

北条氏康略伝

一、永正十二年氏綱長子として小田原に生る

一、天文四年氏康二十才

今川氏親の女を娶る

母は中御門大納言

胤の女で後瑞溪院となる。

一、永祿三年引退し六月

氏政に家督をゆづる

一、元龜二年十月三日卒

す。五十六才

世上に謂はれる所の氏綱

氏康時代即ち総武を併呑し

北条氏全盛時代を築きあげた武将です。



この画像は天神社の別当寺である三光寺の什宝であったものであるが、明治維新の神仏分離の後に廃寺となつて、その時、他の什宝とともにこの画像も、近接の居神社に移されていたが近年天神社蔵として遷ったものである。画幅は縦六三・八センチ、横三四・八センチ(本地)ある。画の作者は不明であるが、管公が

考 鶯 紙 杉 山 康 輔

「ケンヤキ」 塚は、小田原 ケンヤキとも 謂われ、江戸 時代から大正 の初期頃まで 小田原旧市内 から上下両郡 にかけて、専 らこの地方で 揚げられた風 の一種であり

けたのを高く掲げて行くのを見たが、ケンヤキ風によく似ている処から、ケンヤキ風はクルスから出発しているのではなからうか、かくれキリシタンとは言わな いまでも着想はこの辺にあるのではあるまいか、ケンヤキ風の画面にキリスト処刑の図を画いたならピットリ当てはまるのではあるまいか。

即ち北条氏康の息女、その貞節を讃え申ふ和歌を小田原史談会として、その墓前位牌に捧ぐべく用意もの 戦国をいたくしのぶも婦 節知る 天目山をつゆの晴れ間に の短歌を焼香と共に供へた り。 つら／＼懐ふに戦国時代の 武將、敗者の哀れさ、強勢 の武田氏、勝頼の美濃十八 城の大勝、攻略の華々しき 戦捷にひきかえ、その後、 年余にして長篠の戦いに大 敗して万余の軍を失い、部 下散逸し軍勢五百となり、 三首と減り、最後の従者五 十人を欠き、天正十年三月 十一日遂に此天目山に遁れ 入り、最早これまでと、奥 方に実家の北条氏へ行き逃 れよと推められしも、勝頼 夫人は夫に殉ずるとて、そ の黒髪を切り

ます。その落祥も不詳で、 文献にも見当らない、竹骨 を十字に組み、両翼を下へ 折り曲げ、その下に房を垂 らし、表に日本紙『西のう ち』をつないで張り、画面 は製作者夫々の趣好によっ て図柄を撰ぶが蛟龍昇天の 図とか、坂田の金時、鐘馗 家紋などをあしらった画が 圧倒的に多かったが一応男 の子の成長を祝福する武張 ったもので、相模風の中で 特徴があった一般に東京で は正月風揚げしたが小田原 地方は端午の節句を中心と して海岸や空地で揚げられ た、大きさは様々であった が『西のうち何枚張り』と 云う尺度で表現された。こ の頃は季節風が南から北に 向って強く吹くシーズンな ので尙お電灯、電話線の障

民の年中行事の一つとされ 端午の節句が男の子の祝日 心密かに子供の壮健と出世 を願う親心を思うと蛟龍が 雲に乗って天を駆け廻る図 とか足柄山の金時の画など もこの現れであろうと思う

原史談会が縁に繋がる思い にかからるゝや切なり。 戦国先、伊豆鶴岡城主清水 の祖先、伊豆鶴岡城主清水 上野守源正令、弟豆州目良 豊が北条落城の際、小田原 城中にて落城の日天正十八 年七月十一日討死せる惨事 を思い合せ、戦時武將の花 々しく悲壮なるに同調せら るゝものなり。小田原城が 昭和三十五年再建なりたる 折、祖先を供養し、天守閣 和歌集を編著し置きたりき 雲峯寺に武田信玄使用の軍 旗かの有名な風林火山等 戦国当時の遺物の数々見、 釜無川に信玄塚の跡を見学 し、水石を記念に持ちて帰 原せり。

天目山見学

清水 吉郎

降りつづく梅雨に柔じられ 小田原史談会の甲州武田史 跡めぐりの六月二十八日、 幸い早朝より晴れ渡り一行 百十名ともに天気を悦びあ いて、中井市長の励まし の辞に送られ、二台のバスに て朝七時半郷土館を出発し 松田インターンより御殿場 經由 籠坂、山中湖、富士 吉田、河口湖、御坂トンネ ルの長きを出て、勝沼、石 和より田野を経て十一時天 目山に到着す。

武田敗戦の菩提を弔らはん と徳川家康が建立の具徳院 の七堂伽藍は民家の失火に 由り焼失して、今は谷よき 世代から忘れ去られている やがて遠い過去のものと な っ て 永 久 に この 世 から 消 滅 する日も近い。 こう思つて私は子供の頃 の記憶を辿つて作つたもの を郷土文化の資料にした。 画は田島健吉老に画いて貰 った、私はもう一度ケンヤ キ風を作り、今度は画面に 他人が試みたことのない キリスト受難の像を画いて みたいと思つている。

黒髪を乱れたる世ぞ果て しなき、 思ひに消ゆる露の玉の緒 の辞世歌を添え小田原へ送 り、実に十九才の妙齡にて 自害し果てしを悲憐の極み 貞節の鏡と茲に淋しく語り ぬ吾生ひたる生書石に、目 のあたり偲びあい、戦国北 条の歴史を地元を持つ小田

私にはケンヤキ風について こう思ふケンヤキは長崎風 だ、長崎にケンヤキ風はな いが唐津から隋臣して来た 土とか、或いは、町人とか が工風して小田原で作りに 上げたものであるまいか。

先頃長崎原爆記念行列の 中に沢山の短かい紙を附

白雲去来天目山 梅雨中晴寺門開 五輪墓石號殘語 偲貞節勝頼夫人 四五、六、二九